

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第210次)

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなってきました。大極殿院の四周は桁行14尺、梁行10尺を基本寸法とする複廊構造の回廊がめぐり、大極殿院内部については、回廊に囲まれた広場(内庭)の中央に大極殿だけがそびえ立つ構造が長らく想定されてきました。しかし、2019年度に実施した第200次調査で大極殿の後方を区画する「大極殿後方回廊」を発見したことで、大極殿院がほぼ2:1の割合で南北の区画に分かれており、前期難波宮の内裏前殿区画に近い構造をもっていることがあきらかになりました。

前期難波宮を参考にすると、大極殿北方の区画には後殿とその付属施設の存在が想定されます。ところが、第205次・第208次調査の結果、区画内部で建物が造営された痕跡は確認できず、空間であったことが判明しました。いっぽうで、大極殿の北側で未知の基壇が発見され、その全容解明が新たな課題となりました。以上の経過を承けて、大極殿の西北に565㎡の調査区を設定し、2022年5月9日～8月26日にかけて、発掘調査を実施しました。

調査の結果、大極殿の北側に東西約50m、南北約16mの長大な基壇(「大極殿後方基壇」)が存在し、

東西端で大極殿後方回廊と接続する構造があきらかになりました。大極殿後方基壇は後世の削平が激しく、礎石据付痕跡等、直接的な建物の痕跡は確認できませんでしたが、凝灰岩による基壇外装の痕跡を検出しています。さらに、大極殿後方基壇の周囲に多量の瓦が散乱していたことが第20次調査と第208次調査でわかっています。こうした周囲の状況から、凝灰岩切石の外装を備えた大極殿後方基壇の上に、瓦葺建物が存在していたと考えられます。建物の規模や構造に関する詳細な情報は得られていないものの、大極殿後方基壇は大極殿後方回廊の基壇より南北に約3mずつ張り出していることから、回廊より梁行の大きい東西棟の建物が想定できます。

大極殿後方基壇上に想定される建物の機能に関する手がかりは得られていませんが、基壇から復元される平面規模や大極殿との位置関係から、この建物は「大極殿後殿」であり、大極殿後方回廊は大極殿後殿と大極殿院回廊を接続する軒廊こんろうと理解できます。こうした建物配置は前期難波宮における内裏前殿と内裏後殿の建物配置とは微妙に異なり、奈良時代前半の平城宮の東区下層の正殿と後殿の建物配置に近いものでした。すなわち、藤原宮大極殿院は全体では前期難波宮に近い規模と構造をもついっぽうで、殿舎の配置では後の平城宮につながる要素を既に有していたのです。これは、古代日本の宮都構造の変遷を考える上で重要な成果といえます。

8月6日(土)には現地見学会を開催し、468名の方々に調査成果をご覧いただきました。当日は雨で足元の悪い中お越しくださり、ありがとうございました。現在、調査区は既に埋戻しを完了し、報告書作成に向けた整理作業を進めています。今後の奈文研の調査にも引き続きご期待ください。

(都城発掘調査部 道上 祥武)



調査区全景(北東から)



基壇外装の痕跡(二上山産出の凝灰岩片を含む)